

# 山本悌二郎コレクションと澄懷堂美術館

井後尚久

## はじめに

一般財団法人澄懷堂美術館は、政財界で活躍した山本悌二郎（一八七〇—一九三七）が明治から大正、昭和初期にかけて蒐集した中国書画を中心とする美術館である。そして、山本翁の側近であった猪熊信行（一九〇六—一九九一）がそのコレクションを譲り受け、三重県四日市市水沢の自宅に長く保存していたもので、明清の書画コレクションでは日本一であろうと思われる。

水沢は茶畑が広がる風光明媚な土地柄である。山本のコレクションは第二次世界大戦中、東京大空襲の直前に猪熊の故郷である水沢に移された。戦後、猪熊は、東京で仕事をしている間も散逸していたコレクションの再蒐集に努め、一九六三年、美術研鑽・鑑賞の場所として私費で澄懷堂文庫を建設し、そこに山本翁のコレクションを移し保存した。文庫には松下幸之助・和歌森太郎・福田超夫・米澤嘉保・丹羽文雄などの政界人・財界人や研究者などが訪れ、中国書画を鑑賞した。山口誓子が一

九六七年に澄懷堂文庫で読んだ句は、猪熊によって句碑が建立されている。その後、一九七五年頃から、このコレクションを広く一般にも公開し鑑賞

できる施設として美術館を建設する計画が立てられ、一九八六年に財団法人澄懷堂を設立。そこに猪熊が山本翁から譲り受けた、『澄懷堂書画目録』に掲載されている中国書画、日本の儒者の書、俑や陶磁器、坂東貫山の旧蔵品の古硯や文房具（筆・筆筒・墨・腕枕・筆架）などの収蔵品を、澄懷堂文庫とともに財団に寄贈した。そして一九九一年、四日市市鶴



澄懷堂美術館正門（三重県四日市市水沢町）

の森に念願の美術館が完成し、二〇一七年の春季展まで美術館活動をを行う。

時代の移り変わりとともに、財団法人澄懷堂は二〇一三年四月から一般財団法人澄懷堂となり、美術館も展示施設を移し、現在は四日市市水沢町の澄懷堂文庫を澄懷堂美術館として活動を行っている。

そこで、本稿ではまず次の二点について紹介したい。

- (1) 財団法人澄懷堂に全ての美術収蔵品と澄懷堂文庫を寄贈した創設者、猪熊信行翁のこと。
- (2) 『澄懷堂書画目録』の美術品を蒐集した山本悌二郎翁のこと。



山口誓子の句碑

「小鳥来て聖賢の手の粉食べる 誓子」

## 一 猪熊信行翁のこと

財団法人澄懷堂に全ての美術収蔵品と澄懷堂文庫を寄贈し、澄懷堂美術館を創設した猪熊翁については、活字化された資料が全く残っていない。これから顕彰作業が必要である。今回は管見の及ぶ範囲で紹介したい。

猪熊信行は、四日市市水沢出身で一九〇六年生まれ、一九二五年三重県立久居農林学校を卒業。教員を経て伊勢電鉄（近鉄の前身）社長の秘書となる。その後、山本悌二郎の側近となった。盧溝橋事件（一九三七年）の頃、中国天津の裕大紡織公司の経営を任される。この裕大紡織は一九三八年に国策会社東洋拓殖に合弁された。この東洋拓殖の財力を背景にして、大陸で製粉事業も手掛けた。日本の敗戦色が濃くなり始めた頃、東京も空襲があることを予見した猪熊翁は、山本から受け継いだ中国書画をはじめとした美術品を故郷の水沢に疎開させた。この美術品が現在に受け継がれている。戦後、一九四七年、三重交通株式会社社の取締役就任、社団法人三重県モーターボート競走会会長、椿神社奉賛会総裁などを務めた。

猪熊翁は私財を投じて、山本から受け継いだ美術品を広く一般に公開できる設備を整え、一九八六年に中国書画の啓蒙普及を目的とした財団法人澄懷堂を設立し、初代理事長に就任した。一九九一年没、享年八五歳であった。

東洋拓殖株式会社と裕大紡織公司との当時の事情について触



東洋拓殖株式会社京城本店（1938年12月）



天津紡績工司と裕大紡織工司（1938年12月）

れておきたい。東洋拓殖株式会社とは、一九〇八年、日本の朝鮮統治時代に朝鮮における拓殖資金の供給および拓殖事業を目的とした半官半民の特殊事業会社であり、創業当時は京城（現在のソウル特別市）に本店があった。その後、一九一七年一月に東京に本社を移す。この東洋拓殖株式会社が紡績事業の一環として、一九二二年に天津の裕大紡織会社の工場を担保に貸し付けを行っていた。当時、紡績業界の不振と一九二〇年に勃発した奉勅戦争（一九二二年、一九二四年の二回にわたって戦われた軍閥間の戦争）により地方財界は不況を極めていたため、一九二四年以降二〇年にわたり工場の委託経営を引き受け、さらに大福公司にこれをまた委託経営させていた。次いで

一九三六年七月、裕大工場に隣接していた宝成紡績工場を買収して、裕大工場と二つの工場の経営を目的とする株式会社天津紡績公司を設立し、裕大工場の経営を委託した。

## 二 山本悌二郎翁の生涯

『澄懷堂書画目録』の美術品を蒐集した山本悌二郎翁は、号を二峯、香雪書屋とし、新潟県佐渡市（旧真野町新町）の出身で一八七〇年に生まれた。一八八六年に外務省書記官・特命全権公使川弥二郎（一八四三—一九〇〇）の随員としてドイツにわたり、ライプチヒ大学で農学の博士号を取得。一九二五年に台湾製糖株式会社社長に就任した。その後、田中義一内閣・犬養毅内閣で二度農林大臣を務めた。一九三七年二月一日没、享年六八歳であった。

山本翁は、六八歳で没するまで、東京市上目黒字五本木二六五八の七区画（二万三千坪）の自宅で自適していた。山本翁のコレクションを受け継いだ猪熊翁は、当時のようすを次のように回顧している。

書斎といっても、これは、ドイツ式の洋館



山本悌二郎邸の区画  
（『目黒区地図』1942年11月5日現在）

で、建坪は二百坪はある。日本家屋の母屋（四百坪）とは、赤いジュウタンを敷いた百五十メートルの廊下で結び、冬は、この廊下だけで、石炭ストーブ二基が置かれていた。二峯先生は、山本邸の文関に翁同龢の書額「澄懷堂」を掲げ、この書齋を「澄懷堂」と名づけ、中国美術、なかでも宋元明清の書画に埋もれて生活していたわけだ。（中略）その澄懷堂の床の間には、先生自身が書かれた一軸が掛けてあった。その書は、明・清両朝に仕えた王鐸の影響をうけて、雄渾、自由奔放にして、格調が高い。二峯先生は、朝夕その前に端坐して、刀剣を愛で、またあるときは所蔵の書画をひもとき、あの『澄懷堂書画目錄』十二巻を編纂し、ほかに『宋元明清書画名賢詳伝』十六巻を著したのだ。

また、山本悌二郎翁は、大東文化協会の設立にも深く携わっている。大東文化協会の設立は、木下成太郎（一八六五—一九四二）が提唱した儒教思想で日本文化を復興させようとする運動から始まる。この運動は、貴族院議員・衆議院議員・学者・実業界にまでひろがった。一九一八年原内閣で木下成太郎は、日本国内の東洋学芸衰退の現状について発言し、明治以来急速に欧米文化が日本に流入し東洋文化を基調とした生活文化の変容したことは、古来よりの日本の伝統が失われることにつながると警鐘を鳴らした。そして、その打開策は、日本文化の底流をなしている、儒教思想を中心とする日本文化の復興こそが、国家百年の大計であると主張した。そして一九二一年三月一八



『大東文化』大正十三年七月号 第一巻七号

日、第四十四議會（原内閣）の衆議院に「漢学振興ニ関スル建議案」を上程し、儒学振興運動は国の助成金に裏付けされた運動として具現化していった。この「漢学振興ニ関スル建議案」を具現化するためには、民間の漢学振興団体の設立が必要であった。それが大東文化協会である。この大東文化協会設立に関して山本翁は最初から携わっている。この協会設立の会合も、衆議院開催と呼応して合計五回行われた。第一回設立会議は、一九二二年四月一日に行われ、出席者は、近衛文麿、大木遠吉、酒井忠正、榎本武憲、杉溪言長、佐竹義成、江木千之、奥繁三郎、犬養毅、戸水寛人、鶴沢聡明、福島義一、山本悌二郎、下岡忠治、大津淳一郎、古島一雄、小久保喜七、小川平吉、高橋光威、大口喜六、木下成太郎であった。同年四月十五日、協会事務局は神田錦町三丁目十番地の東京工科大学校内に

設けられた。大東文化協会創設の目的は左記のとおりである。

- (イ) 我が皇道に遵い及び国体に遵化せる儒教に拠りて国民道義の扶植（うえつける）を図ること。
- (ロ) 本邦現時の情勢に鑑み、漢学者養成について応急の手段を講じ、追って大学を設立すること。
- (ハ) 文書講演その他の方法に依りて、前項の目的の達成に努め、時宜に依り海外に亘り斯学の進展を図ること。
- (ニ) 高等教育に於ける漢学の教科に関する編成並びに教科書及び教授法の改善を図ること。

(ホ) 前諸項その緒につくを俟つてさらに東亜の美術音楽等の維持発達を図る事業に着手すること。

そして、会頭以下の役員は先の人々で構成されていた。会頭、伯爵大木遠吉。副会頭 江木千之・小川平吉。理事、伯爵松平頼寿・子爵八条隆正・大島健一・仲小路廉・和田彦次郎・男爵杉溪言長・男爵舟越光之丞・北条時敬・山本悌二郎・木下成太郎・下岡忠治・小久保喜七・大津淳一郎・古島一雄・副島義一・市村瓊次郎・江木衷・牧野謙次郎・内田周平・三島毅・藤山雷太。

一九二三年七月一日、神田中央仏教会館で行われた講演会では、副島義一・江木衷・中村進牛・鶴沢総明が講演した。内容は、儒教を学ぶことの意義を説くもので、大東文化協会の発会の意義を鮮明にした。その後、同年九月一日に土地と校舎を買収し、同二十日に財団法人組織の許可を受け、大東文化学院を開き、教化・出版・研究・調査の各部を設けて東洋学の啓蒙普

及に努めた。そして、協会内に大東美術協会が編成され、中国書画を中心とする出版が行われた。

この大東文化協会は中国の書画を中心として研究する大東美術振興会を設立して、機関誌『大東美術』を発刊した。この機関誌にも山本翁の収蔵していた作品が掲載されている。

また、山本翁のコレクションは、芥川龍之介の紹介によって志賀直哉の編集したコロタイプ版美術写真集『座右宝』に掲載された。そして一九二八年には昭和天皇御大典の記念行事の一環として「唐宋元明名画展覧会」に展示された（一九二八年一月二四日～二月一六日、東京国立博物館（旧東京帝室博物館）と東京都美術館（旧東京府美術館両館））。その他、個人的に山本翁の邸宅を訪れた来客者で、中国書画に関心のある人には、惜しげもなく見せていた。そのような垣間見ることがで



晩年の土屋竹雨



詩文誌月刊『東華』

きるのが志賀直哉の「香掛にて」である。

山本翁の幅広い交友関係の中で、漢詩人であった土屋泰久（一八八七—一九五八。号は竹雨）は芸文社を創設し、詩文誌月刊『東華』の主幹となり国内外の詩人の漢詩を掲載し交友をはかった。

この『東華』には、山本翁のコレクションも数多く図版入りで紹介された。

山本翁の蒐集は中国書画、日本近世の儒者の書、古銭、古硯、古銅器、漢鏡、日本刀と多岐にわたった。その中で一番精力的に蒐集したのが中国書画である。彼自ら福建省、江蘇省、広東省などに住んでいる素封家を訪ね、気に入った作品があると購入した。また、山本翁は漢詩を中心とした同人誌『東華』に、毎月のように漢詩を投稿し、彼自身も詩集を刊行している。『游燕詩草』（一九二六年刊）、『昼錦集』（一九二七年刊）、『梅花集』（一九二七年刊）、『蕉雪吟館詩草』（一九三三年刊）

の四編である。

一九二三年九月一日の関東大震災をきっかけに、中国書画の收藏品目録を作ることを決意した。そして、收藏品のそれぞれの作家の伝記を調査研究し、収蔵点数約二千点のうち、目録に記載する作品の選定作業も行った。その結果、一九二七年に『宋元明清書画名賢詳伝』、一九三一年には一七六点を掲載した『澄懷堂書画目録』をそれぞれ発刊した。この膨大なコレクション蒐集に貢献したのが原田悟朗であった。

#### （一）山本悌二郎翁と原田悟朗

山本悌二郎翁が台湾製糖株式会社（以下「台湾製糖」とする）の社長時代から交流があり、山本翁が中国書画を蒐集するきっかけとなった原田悟朗との交流の背景を紹介したい。

山本翁と原田悟朗の関わりについて説明するためには、まず日清戦争（一八九四—一八九五）で日本国が清国に勝利したことと、次に中国国内で辛亥革命（一九一一年）が勃発したことが、二人を結びつけたという歴史的な背景がある。

日清戦争の結果、日本が領有した台湾を統治するために、日本製の製糖機器を使用した本格的な製糖事業を興す目的で、台湾総督児玉源太郎の要請と井上馨・益田孝（三井物産専務理事）の主導のもとに、一九〇〇年一月、資本金百万円で創立されたのが台湾製糖である。当時日本は、台湾製糖で出した売り上げで台湾を維持することを考えていた。山本翁は台湾製糖の草創期から携わり、二代目の社長となった。台湾製糖設立

後、中国では辛亥革命が勃発する。辛亥革命が勃発した大正から昭和初期にかけて、犬養毅（一八五五―一九二二。号は木堂。以下「犬養木堂」とする）と内藤湖南（一八六六―一九三四）による、中国から流出する中国書画を国内で販売するようになるといふ働きかけに応じて、中国書画を日本にもたらし普及させたのが、原田庄左衛門と原田悟朗が経営する博文堂であった。そこでまず、博文堂について紹介する。

日露戦争（一九〇四―一九〇五）の頃、原田悟朗は東京から大阪に移り、内藤湖南、長尾雨山（一八六四―一九四二）に相談して国宝の古社寺や絵画、書のコロタイプ印刷を始めた。父の原田庄左衛門の弟である小川一眞（一八六〇―一九二九）は、アメリカでコロタイプ印刷を修行し、日本に初めてその技術を伝えた。そして、彼の技術で美術雑誌『国華』や『真美大



原田悟朗

観』は印刷された。また、この小川一眞のもとで働いていた小林忠次郎を大阪に呼び寄せ、美術品だけのコロタイプ印刷を始めた。

原田悟朗が中国の文化財を手がけるようになったのは、辛亥革命以前に長尾雨山、内藤湖南等と深い関わりがあったからである。辛亥革命が起こり、清朝の内府に仕えていた高官たちは経済的に困窮し、生活に困るようになった。そこで彼らは京都大学の内藤湖南を訪れ、手持ちの中国の芸術品を換金してくれる適当な仲介者を紹介してほしいと要望した。当時、同じような要望が日本の外務省を通して、犬養木堂にも届いていた。

清朝最後の皇帝、宣統帝の傳育官長をしていた陳宝琛（一八四八―一九三五、号は弢庵）は、内府に収蔵されていた書画が革命騒ぎで散逸することを心配して、その時、散逸の危機のあった作品の中から、「せっかくの名品だから、同じ東洋の国である日本で保管してほしい」という特別な依頼を付して、原田悟朗に送った。現在、大阪市立美術館の阿部コレクションの中にある、文嘉（一五〇一―一五八三）の有名な「琵琶行図」などもこの中に入っていた。また、革命後しばらく経った頃、中国の軍閥の巨頭で、第二次段祺瑞内閣（一九一七年）に入閣した林長民の場合は、生活費というより、内戦のための軍費調達のために原田悟朗のもとに美術品を送ってきた。原田悟朗は林長民が送って来た荷物の思い出を次のように語っている。

林長民さんからの品物は、あの大きな中国トランクに十数個もあって大変な量でした。しかもその荷造りが、きつと

部下の兵隊にでもさせたのでしようが、トランクの上へ何重にも縄をかけた、とても頑丈なものだったことも印象深く、それでよくおぼえております。しかも、軍人だというのに趣味もよく、名品も多かったと思います。

この林長民が送った荷物の中に、呉歴（一六三二—一七一八）の「岑蔚居産芝図」も詰め込まれていた。この作品は、のちに朝日新聞社社長の上野理一の收藏に帰し、現在は上野コレクションとして京都国立博物館に收藏されている。このように、中国の内府、政府高官からの相談を受けた内藤湖南と犬養木堂の二人が推薦したのが、博文堂を経営していた原田庄左衛門であった。そこで、息子の原田悟朗は大量の中国の美術品を早急に売りさばかねばならなくなつた。まず最初に中国から届いた荷物を、上野理一、毎日新聞社社長の本山彦一、第百三十銀行頭取の小川爲次郎に相談したところ、三人が全て引き取つた。しかし、その後も中国からの品物は次々に送られてきた。そのため原田悟朗は日本の素封家に中国書画を周旋するようになった。

原田悟朗は、犬養木堂、内藤湖南、長尾雨山、狩野君山、羅振玉等と深く親交を結び、販売ルートと購入ルートを開拓していった。販売ルートは関西方面が中心であったが、東京では山本悌二郎翁、菊池惺堂も販売先であった。国策会社台湾製糖の幹部であった山本翁は、「東洋のものは東洋に残そう」という考えであった。そのために、軸箱を作る金があれば、一幅でも多く蒐集するように心掛けた。また、当時は一切箱は作らず、

新聞紙の印刷インキが虫除けになったため、購入した掛軸を新聞に包み、徹底的に蒐集に努めた。

次に山本翁自身の書いた『澄懷堂書画目録』からその蒐集スタイルを紹介する。山本翁は父の山本訥齋が蒐集した儒者の書の話の聞いて育ち、上京してからは自身で儒者の書を蒐集していたが、さらに進んで中国書画・金石を蒐集するようになったという。そして福建省、江蘇省上海、広東省から北平山東省に足を運び、高名な收藏家や名家を訪れ、良い作品があれば詳しく調査し、値段を量って購入した。そのような努力の結果、関東大震災以前には蒐集した書画は二千余件にも及んでいた。また、山本翁が政界に入る前後のいきさつについて、原田悟朗は次のように語っている。

お金がおりなものだから、それに目をつけた連中が何とか政治に引き込もうとする。ご自分をはじめは政治なんてあんな俗なものはいやだとおっしゃってたが、そのうちずるずる入ってしまった。（犬養）木堂先生が書画の上から懇意だったんでしよう、おやめなさい、自分は天下の貧乏人だから金がないといったって誰も文句はいわない。ところが君は金がないといったって誰も承知はしない。井戸堀になってしまふから、とずいぶん忠告なされた。代議士に出られる前でしたか、木堂先生から湖南先生と私の父に連絡があつて、いついつか山本君が関西に行くから絶対に代議士に出るのをやめさせるように話があつた。私も瓶原の内藤先生のところへ御案内したんですが、先生もしき

りに止めなされた。泊まるのは私どもの花屋敷の松茂山荘で、夜は父がまたしきりにおやめなさいっていったんです、ところがだんだん政治の方に傾いていって、とうとう政治家になられた。お金がいくらでも要るんですね、政治家ってのは。それでだんだん品物を手放すようになられた。ところが私の方は前におやめなさいって何度もいっているでしょ、だから私の方には金に換えたいっていいない。その頃、京都に田中寸紅堂（田中王城）というのがあって、いいものをどんだんアメリカへ持っていった。そこへ、山本さんが目を付けてアメリカへ向くものをずいぶん出された。結局、私の方が苦勞して日本へ持って来て、それを寸紅堂がアメリカへ持っていった。残念なんです、結局東洋のものを東洋に残すという、はじめの山本さんの主旨に反するようなことになってしまった。（中略）大臣になられてから一遍、湖南先生を訪ねたいというんで、私のところへ泊まって、翌日、瓶原の恭仁山荘に行かれたんです。（中略）瓶原に行ったら、山本さん、えらく先生の意思に反しまして政治に首を突っ込みましたが、お詫びをかねてご挨拶に参りました、とおっしゃるんです。それでね、私、先生に今の話をして、あなたにこんなまでして大臣になってどうなんですっていったんです。そうしたら、うーんといって何もいわなかった。

これは中国書画を中心に交友を重ねた、原田庄左衛門、原田悟朗、内藤湖南、犬養木堂たちが、山本悌二郎の政界入りに対

して、猛反対していたことがよくわかるエピソードである。また、周囲の反対を押し切って政治家になったあと、周囲の人間に改めて挨拶に行く姿に、山本翁の実直な人間性が垣間見える。また台湾製糖時代の山本翁は、国策会社で勤めていた役人と、しばしば衝突をしていた。山本翁自身の講演会で次のように述べている。

なかなか総督府の役人と吾輩の間が折り合いというものが常に円満にはいかなかった。それがために総督府の役人側の吾輩に対するところの攻撃が随分盛んなものであった。

ついに吾輩を肝煎りして台湾へ遣った井上（馨）公爵まで持ち込んで、吾輩が中間に帰郷したときに井上侯から呼ばれて「お前は役人と衝突ばかりしておるそうだが、そんなことではいかぬ。一体役人を扱うには役人の扱い方というものがあるから、その呼吸をよく心得てやらないと、ただ理屈一方で突き抜けようとしても、なかなかそうはいくものではないのだから」という注意があったくらいであるが（以下略）

次に山本翁の漢詩人としての一面を紹介したい。詩友には日本人では国分青厓、滑川澹如、長尾雨山、内藤湖南、土屋竹雨、服部空谷が居り、中国人では汪榮、鄭孝胥、呂美孫女史等との交友があった。山本翁の詩風は宋詩に近いとされていて、梅聖俞、王臨川、蘇東坡、陸放翁などの詩人を好んだ。山本翁は詩に対して、詩は「言詩」であるという信念を持っていた。つまり詩は「心の表現」であって、遊戯的に文字を弄するものでは

ないという考え方である。漢詩を最も好み、大臣になって忙しい時でも、自動車の中に古人の詩集や韻書があったと言われている。書については、書風は米芾（宋）、王鐸（明）、傅山（清）、許友（明末清初）の書を好み、自分の作った漢詩文を作品にしている。

山本翁のコレクションは、儒者の書、中国書画、古銭、古硯、古銅器、漢鏡、刀剣を蒐集していた。その中でも、中国書画と刀剣蒐集に重きをなしていた。

彼の蒐集の手ほどきは父の桂であった。桂は儒者の書を沢山集めており、山本翁もその傍らで話を聞いているうちに、作品の内容を理解するようになっていったという。父の没後、そのコレクションは散逸してしまった。その二十年後、山本翁は東京に居を遷してから、自ら美術品を蒐集するようになった。初めは父が集めていた儒書を集め、そこから中国の書画金石の蒐集を行うようになり、やがて中国歴代名家の作品を網羅的に蒐集することを目標とするようになった。この中国書画に関心をもち網羅的に蒐集するようになった要因の一つに、内藤湖南との出会いがあったと考えられるが、いつ頃から山本翁と湖南が関わりを持ったかは今のところ判然としていない。

山本翁は、中国の福建省・江蘇省上海・広東省などの土地土地の収蔵家や鑑賞家を行脚し美術品を購入していった。購入するときの逸話が残っている。

上海でのことであった、山本翁は書画を売る店頭で数十の梱包された貨物に目をとめた。そして、その荷物がアメリカ向け

の古画の荷物であることを知ると、中身を調べずに一挙に購入したという。

山本翁のこのような行動には理由があった。辛亥革命以後、中国書画の名品が中国からヨーロッパやアメリカに流出していくことを惜しみ、少しでもアジアに留めておきたいという真情からであった。

勿論このような蒐集方法をとれば、贋物等も多く混在する。しかし、山本翁は「自信で買い、しばしば失敗をしなければ鑑識は進まない」と考えていた。つまり、自分自身の経験と知識を傾けて購入した作品が贋物であっても、そのような失敗をしなければ、鑑識眼を高めることにはならないという考え方であり、周囲にもそのような話をしていた。

このようにして蒐集した中国書画の作品は、最終的に二千点余りにも上った。そして、それらの蒐集品に対する意見を、機会があるごとに東京の大村西厓・滑川澹如・黒木欽堂・河井荃廬、関西では内藤湖南・長尾雨山の諸家に聞きながら一一七六点に絞り『澄懷堂書画目録』に載せ、その目録に載せた作家の詳伝を『宋元明清賢詳伝』十六卷（一九二七年刊）に綴った。また、儒者物のコレクションは別途九百点以上あったと伝えられる。

少し時代を遡るが、一九一六年頃に大村西厓が山本翁の招きで作品を鑑賞した時のことを、次のように述べている。

近來の、美術の興隆と共に古画を弄ぶ人の随分多く、眼の利く人もあるようであるが、それは主として骨董的に古

画を観る人で、伝来とか伝説とかを重んずるけれども、純真の芸術として賞するのではない。随つて古い日本物や、若しくは久しい以前に伝わった支那物等を重宝がるけれど、近頃舶来する明清の画は、喜ばない。(中略)斯かる世の中に於いて、山本氏が明清の美術的価値に着目し、これを愛蔵されるのは、その明に敬服せざるを得ないのである。のみならず、氏はこの方面に関して充分の素養を積んで居られる。支那画の知識に明るく、作者の伝来に精しきは勿論、蒐集される一々に就いて、皆その由来を明らかにして居られる。(中略)決して骨董好事家ではない。美と醜とを判別する審美的眼光を確かに具えておられる。(中略)一々に精細なる目録が出来て、部類に随つて几帳面に整理してあつた。実に鑑賞家として珍しい人であつた。

この証言により、一九一八年頃には山本翁は収蔵品の部類による精緻な目録を作成していたことがわかる。

山本翁のもう一つの代表的な蒐集品に刀剣があつた。山本翁に刀の鑑賞の手ほどきをした榊原浩逸(号は鉄硯)は、土屋竹雨とならぶ漢詩の教示者でもあつた。大正末から昭和のはじめにかけての愛刀家・藏刀家としては東の山本悌二郎、西の河瀬虎三と言われるほど有名であつた。山本翁の収蔵していた刀は千振りにも上つたといわれる。

山本翁が日本刀を蒐集するときのようすや蒐集した刀の真贋について、本阿弥光遜は次のように伝えている。

山本さんの蒐集振りは実に胸の透く様なみごとなもので良

品を見出したとなると、殆ど値段を顧みずに直に買取つて仕舞うのであつた。大抵の愛刀家と云うものは、自分で良い刀だと思つても、イザ大金を投じて買い取るとなると、必ず誰かその道の大家なり研究家なりに見せてその意見を糺ただした後、安心して買い取るのであるが山本さんの場合は良い刀だと信じると別段誰とも相談せずどんな高価なものであつてもスパツと買つてしまう。その度胸の良さは山本さんの傑れた点であるが、それでいてその買い取つた刀が唯の一本も買い被りがなく、現在個人国宝なり、或は重要美術品なりに文部省から指定されているものが山本さんの旧藏刀に多いのを見ても鑑識の点も実に鋭いものであつたのである。

この話から次の二つの点がわかる。

- (1) 山本翁は、書画蒐集と同じように自分自身の判断で欲しい刀を豪快に買い取つていた。
- (2) 刀に対する鑑識眼は大変優れていた。
- (3) 良い刀だと信じると別段誰とも相談せずどんな高価なものであつても即断で買つていた。

山本翁は刀の蒐集に関して、次のように言つていたという。「僕は日本刀趣味を普及させて日本刀に親しんで日本人たるを自覚させ、もつて国民の間に眠り込んでしまつてゐる日本精神を呼びさましてやるのだ」と。

本間順治(一九〇四—一九九一。号は君山)が山本翁の刀を鑑賞したときのように伝わつてゐる。

本間が悌二郎の刀を鑑賞できるよう榊原鉄硯を通して悌二郎にお願いをすると、悌二郎の方で「どうせみせるのだから、お友だちもみんな連れてきなさい。」という返事をもたらす。国藤廉太・漢詩人土屋久泰・中央刀剣会向井鼎・予備海軍大佐国分勝彦と山本邸を訪ねると、悌二郎の名刀を全部大広間にならべて準備して貰っていた。その時、本阿弥光遜がいろいろならべたり油を拭っていた。その当時としては大名刀を沢山鑑賞し、その後御馳走になって余興に入札鑑定が行われたという。

次に、悌二郎と刀剣会の会員との交流から、収蔵家の一面が窺えるエピソードとして本阿弥光遜の証言を紹介したい。

大震災の少し前、丸の内が開かれていた本曜会と云う刀剣趣味の会合があった。相当な名士ばかり出席していた会で毎回本阿弥光遜が出席して指導をしていた。この時も研究刀は悌二郎の刀を光遜が借用して出品した。ところが或る例会の帰りにブラリと悌二郎が出席し一生懸命鑑定していた。悌二郎は余りにも沢山の刀を所蔵しているものだから、その内の一本に備前物の名短刀が自分の藏品であることを忘れてしまっていた。サア、此の短刀にスツカリ惚れ込んでしまい、光遜を呼び「本彌君是非あの短刀を乎に入りたいが何とか盡力をしてくれ、金は何程高くともよい。」と真面目になって頼こんだ。光遜も笑のをこらえて承知した旨を答えると大いに喜んでそのまま帰ってしまった。その後で列席の会員に此事を話すと、日石の田中大郎氏、朝

日の杉村楚人冠等が面白がって、是非あの短刀を再び山本君に買ってもらいその金で大いに呑もうと云う事になってしまった。後日、光遜が改めて此の短刀を山本邸へ持参して買って参りましたと報告すると大変喜ばれて「早速金を渡す。」と言った時、始めて、光遜は「この短刀は先生の御所蔵のものですよ」と打ち明けた。すると、流石の悌二郎もギャフンと参ってしまった、光遜をおだてあげて悪戯を企てた本曜会の面々を全部自邸に招待して、大いに御馳走して盛大な刀剣会が開かれた。後日、悌二郎は此の時の顛末を細々と書いた漢詩文を光遜に送ったということである。

山本翁は一九二〇年、中央刀剣会の会長となり、中央刀剣会は九段の遊就館に付属し、同館長は常に同会の副会頭に就任するのが慣例であった。専任幹事は予備海軍少佐末岡武俊であった。私費を投じて虎徹会・国広会・忠吉会などの銘刀陳列会を催した。当時、雄山閣から『日本刀講座』全十五冊発刊のため、内容見本の推薦文を山本翁は「現代刀剣界の権威一堂に会す」として書いている。その後、山本翁の愛蔵の刀は三井家と三井合名会社（戦後、財閥解体で解散した）に分けて納まったという。

## (二) 田中義一内閣入りした山本悌二郎翁

田中義一内閣（一九二七年四月二〇日～一九二九年七月二日）の時に、昭和天皇の御大典が行われ、この内閣に山本悌二



第一次田中義一内閣

郎翁は参閣した。まずはじめに、田中義一内閣の組閣までの流れに少し触れたいと思う。一九二七年四月一七日、枢密院によつて台湾銀行救済の緊急勅令案が否決され、第一次若槻内閣は総辞職した。その後、元老は野党政友会総裁の田中義一（一八六四—一九二九）を推薦し、大命が下った。田中義一は一九二五年に政友会総裁に就任し、護憲三派内閣から離脱して野党となり、若槻内閣の对中国政策を軟弱と非難し、枢密院の一部とも連繫して内閣打倒を画策していた。内閣総理大臣になった田中義一は、早速組閣に取りかかった。その組閣にあたって、

基本的に政友会の党員によつて閣僚を埋めたが、司法大臣には非党員の原嘉道を選び、内務大臣には、党員ではなかったが鈴木喜三郎を選んだ。枢密院副議長長平沼騏一郎の系統に配慮を行い、一九二七年四月二〇日、新任式が行われた。内閣の政綱として「財界の不安一掃、産業立国、教育の改善、地方分権、農村振興、社会政策の実

施、司法権の尊厳の維持、対支問題の解決、列国との協調」を掲げた。一九二九年七月二日までの内閣であった。田中義一内閣は次のような陣容である。

総理大臣	田中義一
外務大臣	田中義一(兼)
内務大臣	鈴木喜三郎
	田中義一(兼)
大蔵大臣	望月圭介
	高橋是清
	三土忠造
陸軍大臣	白川義則
海軍大臣	岡田啓介
司法大臣	原嘉道
文部大臣	三土忠造
	水野錬太郎
	勝田主計
農林大臣	山本悌二郎
	中橋徳五郎
商工大臣	望月圭介
通信大臣	久原房之助
鉄道大臣	小川平吉
拓務大臣	田中義一(兼)
書記長	鳩山一郎
法制局長官	前田米蔵

### (三) 尾崎蓴堂と山本悌二郎翁

政界に身を置いた山本翁が、如何に誠実な人柄であったか、その一面が垣間見える逸話を尾崎蓴堂（一八五八—一九五四。本名行雄）は自らの全集の中で紹介している。

山本翁が政治家として活躍していた第一次世界大戦以降、日本の仮想敵国はロシアであった。蓴堂は、ロシアとの親善を深めることが日本の利益であると考え、ロシアを刺戟するような軍備拡張はできるだけ避けなければならないと考えていたため、日本に第二師団増設を求める意見には真つ向から反対であった。しかし、日本とロシアの關係が親善の方向に向かい、大隈内閣（第二次）が成立する頃には、日露協約も出来て、日本側で第二師団を増設しても、ロシアを刺戟することはなくなつた。そこで、蓴堂は師団増設賛成の側に立場を変更した。しかし、当時の議会は必ずしも師団増設に賛同する議員は多くなかつたため、賛同者を募る必要があつた。そこで第一に目をつけたのが後藤新平（一八五七—一九二九）の派閥であつた。当時の後藤は議会に勢力を持つており、派閥の半数が賛成すれば第二師団増設案は通過する可能性があつた。そこで蓴堂の盟友大浦兼武（一八五〇—一九一八）が後藤の所に行き、協力を求めるその後藤はこの申し出を快諾した。そして、後藤派閥の第一番の子分であつた山本翁が賛同すれば、他の代議士も賛同すると樂觀視していた。そこで、後藤は山本翁を呼び、大浦から第二師団増設の案に賛同するように求められたことを説明し、

賛同を求めたところ、山本翁は、「私は今まで増師反対を主張してきているのに、ここで如何に後藤さんの勧めであるとしても、今さら意見を変えるわけにはいかない。他の者に賛成せよと勧めることなどはなおさら出来ない。」と云つて後藤さんの恩義に対して、私は「否」ということも出来ないからこのような役目をせずに済む方法を講じよう」と云つて、議員を辞める決意をした。これは頑なな考え方ではなく、人の世の筋道を通し、情理を尽くした立派なやり方であつたと蓴堂は述べている。かくして、第二師団増設案は頓挫した。

### (四) 山本悌二郎翁の逝去

一二月一四日（晴）山本悌二郎翁は、午後七時に逝去した。この日の山本翁の予定と行動、逝去のようすを『佐渡政党史稿』は次のように伝えている。

対英問題は全国に鳴り渡り、名古屋にては十二月十四日同市公会堂にて、大阪にては十五日中の島公会堂にて、共に国民大会を開き、山本を始め小林、建川の両中将、本多熊太郎博士出演の約束にて他の三人は十四日己に京地を出発し、山本は大東文化協会の役員会議を終へ午後一時「かもめ」にて出発する予定であつた。

此日、山本の同町内より出征する兵士ありたれば、朝五時祐天寺駅にて見送りて一先自宅に帰り十時頃常に倍する元氣にて目黒の自邸を出て九段の大東文化協会に至り役員会に出席した。



山本悌二郎翁の葬儀

大東文化協会の理事会の内容は日中文化の提携のために、一度協会から中国に文教使節を送って居るために、今度は中国側から使節が来日するために、東亜の文教に対する協議案を練るための重要な会議があり、その会議終了前十一時頃、名古屋に行くべく玄関を出でて、自動車に乗らんとして「どうも気分が悪い」と言われた、見送りに出た有田理事が手を貸さんとして出せし処「肩を貸せい」と云うて、有田の肩に寄りかかり引返して玄関に入り、其の脇

の応接室に入り腰をかけた「今日はどうも大変に気分が悪い、手が冷たくて感覚がない様だ、掴んで見よ、之れは脳溢血か脳貧血か知らん」と笑ひながら語られたれば、有田は「手が冷たくて顔の色が白いから、之れは脳貧血かも知れませんが」と答へた。すると「アアそうかも知れん」といふと同時に、フラフラとよろけかかり、白い顔は急に蒼白に変つ

た、有田始め周囲の人々は大に驚き、椅子三脚を並べてベットの代りとし、水野梅曉の膝を枕として全然意識を失った。時に午前十一時四十分であった。早速近所の内科医長沢を呼ぶ、丁度会議に出席して居た日大総長山岡萬之助は日大に電話して二名の医師を招き、変をきいて飯田橋病院長の近藤請悟博士が駆けつける、島倉孝は生前親交のあつた入沢博士へ電話せしも病氣にて来らず、会議出席中の末松階一郎は、電話を以て稲田博士の来診を請いしに、脳溢血と断定せられてベットに移した。其他、八田善之進博士、藤井博士、帝大内科森助教等十数名の医師が駆けつけられる。米子夫人は急報によつて自邸より駆けつけたが、嗣子義次、孫宙造、須田春治等は見送りのため、東京駅に待ち受けたれ共、時間になるも来らざりし故、自宅に電話して始めて此騒ぎを知り、文化協会へ駆けつけ種々手当を施したが薬石も及ばず。午後七時四十分米子夫人を始め家族近親一同に見守られながら六十八歳を一期として巨星は遂に地に墜ちたのである、遺骸は同九時過ぎ目黒の本邸に運ばれ、はじめて喪を発した。

### 三 澄懷堂美術館の名品紹介

次に、現在澄懷堂美術館の収蔵している作品のなかで、有名な作品を紹介する。

#### (一) 金農「隸書餌菊詩」

清 軸 紙本 九三・三×三二・五

金農（一六八七—一七六三）、字は寿門、号は冬心、稽留山民、曲江外史、昔耶居士、龍梭仙客、百二碩田翁、心出家齋、粥飯僧、吉金、金二十六郎、之江釣師、老丁など多くある。三〇代から各地を遊歴し、晩年には揚州に流寓し「揚州八怪」の中心的存在であった。五〇代に入ると「禪国山碑」「天発神

識碑」の筆法を応用した独特の奇偉な形式を作りだした。横線を太く、縦線を細く書くため、筆端を裁断した筆を用いゴシック活字の点画を積み重ねるような縦長の姿をとり、しかも時として竹を裂くような鋭い曳脚を見せている。

内容は、古来長生の薬とされてきた菊を食べることを詠んだ五言古詩「餌菊」を、彼独特の隸書で書いたものである。

葉疎華更疎、寒菊澹如此。有酒香入杯、無人影在水。可以充齋厨、夕糧咲糠粃。浪之得長生、我亦康風子。

厨無突煙、不為所厄何術耶。客居有菊數畦、采之以当夕餐、菊可餌乎、因作餌菊詩一篇。昔耶居士金農手記。

鈐印：白文方印「金農之印」。朱文方印「冬心先生」。朱文方印「老高太平」。



金農「隸書餌菊詩」

(二) 傅山「篆書杜甫五言律詩」

明く清 軸 紙本 一七九・五×四五・七

傅山（一六〇七—一六八四）は、初め名を鼎臣、字を青竹、のちに名を山、字を青主と改めた。石道人・丹崖子など多くの号を持つ。

学者の家に生まれ、經史諸子・仏教・道教・医術に通じていた。三八歳の時、明朝が減じると、道士となり人々の病を治しながら流寓し、清朝からの召し出しにも応じず、抵抗の姿勢を貫き通した。

この作品は、杜甫の五律「觀安西兵過闕中待命」（安西の兵の過ぐるを觀て、闕中に赴き命を待つ）の第二首を草篆で揮

毫したもの。詩の内容は、安祿山の反乱軍討伐のために赴く安西の軍を詠んだものである。明の滅亡への寓意がこめられていると考えられる。

作品の左右に、黄宸熙・宮爾鐸・吳大猷・呂中の題跋がある。

奇兵不在衆、萬馬救中邊。譚笑無河北、心肝奉至尊。孤雲隨殺氣、飛鳥避轅門。竟日留歡讌、城池未覺喧。 傅山

\* 遼一原

鈴印・白文方印「傅山之印」



傅山「篆書杜甫五言律詩」

(三) 李成「喬松平遠圖」

北宋 軸 絹本墨画 二〇・五・六×二二・六・一

李成（九一九―九六七）、字は咸熙。益都（山東省青州）の人。唐の宗室の後裔ともいう。五代（九〇七―九六〇）の最初の王朝後梁（九〇七―九二三）の二代有貞の貞明五年（九一九）に生まれた。彼に仕官の好機が訪れたのは、後周（九五―九六〇）の顯徳三―五年（九五六―九五八）頃のことである。同じ山東省の東平出身の友人、樞密使王朴を頼って都の開封に出た。しかし顯徳六年（九五九）三月に王朴が急逝したため李成は仕官の望みを絶たれた。悶々とした李成は陳州（河南省淮陽）の知事であり大司農の衛融の請いにこたえて淮陽に行



李成「喬松平遠圖」

き、日々深酒をして遂に客舎で酔死した。時代は北宋（九六〇―一二二七）の乾徳五年（九六七）のこと、四九歳であった。後世では北宋の画家としての位置を占めるが、実際に活躍したのは五代の後半期とほぼ重なっている。

画は五代北宋山水画の第一人者に挙げられ、煙林平遠もしくは寒林平遠と呼ばれる山水様式を創始した。この図も典型的な煙林平遠の構図形式をなすもので、現在伝世する李成の作品中、最も注目し値する作品である。

(四) 李寅「山居図」

清代 軸 絹本墨画淡彩 一八五・〇×九五・〇

李寅、字は白也、号は東柯。江都（江蘇省揚州）の人。経歴は不詳であるが、北宋の郭忠恕や郭熙に倣って擬古的な樓閣山水や盤車図を画き、一七世紀末から一八世紀初めにかけての何かの作品が伝わる。

この作品は前景に寒林の樹叢を配し、後景は画面の大部分を使い、左下から右上へと斜めに山脈を連ね、先端を逆S字状に作る。これは五代の荆浩などが氣勢を表すのに用いた構図法である。また山脈の懷に家屋を配し、溪流に水車、曲がりくねった山路に荷を乗せた牛車を配するのは、北宋の盤車図に由来する。かように五代北宋絵画のモチーフを使って裝飾的に巧みにアレンジしたのがこの作品である。左上に職業画家の見地から李寅一流の画論を記し、「東柯李寅記」と款記する。



李寅「山居図」

## 終わりに

澄懷堂美術館は二〇一八年の公開（予定）をめざして、準備を行っている。沢山の中国書画ファンや美術品の愛好家の期待に応えることができるよう研鑽努力を続けていくので、これからも皆様の応援をよろしく願いたい。

### 参考文献

- 朝日新聞社編修室編『上野理一伝』朝日新聞社、一九五九年  
 犬塚又太郎編『新編 土屋竹雨遺墨集』一九七〇年  
 猪熊信行『澄懷堂書画目録』——二峰先生のこと』澄懷堂美術館収集資料  
 大村西厓「山本氏の明清画」『書画骨董雑誌』第一二六号、書画骨董雑誌社、一九一八年二月  
 酒井忠治緒「竹雨土屋久泰先生」『致道』第二三号、一九八七年二月  
 財団法人致道博物館・鶴城清吟会・鶴岡書道会編『大道無門』一九八七年  
 『佐渡政党史稿』昭和政党之巻 第四号（自昭和十一年至昭和十四年八月）  
 『大東文化』第一卷五号、一九二四年六月二十八日

- 大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会編『大東文化大学五十年史』一九七三年
- 土屋竹雨『東華』第百集、一九五五年一月
- 鶴田武良「原田悟朗氏聞書 大正―昭和における中国画コレクションの成立」『中国明清名画展 中国天津市芸術博物館秘蔵』図録、一九九二年
- 東洋拓殖株式会社編『東洋拓殖株式会社三十年誌』東洋拓殖株式会社、一九三九年
- 鳥山克美著『竹雨を語る』南山房、一九七二年
- 二峰先生小伝編纂会編『山本二峰先生小伝』一九四一年
- 本阿弥光遜「刀剣と山本さん」田村満治編『二峰山本悌二郎先生追悼録』一九三九年
- 本間順治『薰山刀話』東京出版、一九七二年
- 吉澤忠「『村山龍平伝』『上野理一伝』紹介」『國華』八六一号、一九六三年一月